

フィールドワーク研究における直接報告の為のシステム構築

梅川通久[†]東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所[†]

1. 序論

フィールドワークを行う研究者は、しばしば専門家のみならず社会一般の視点からも興味深い資料を入手する。本研究では、その様な社会一般にも興味深いと考えられる収集資料の中で、写真等の画像や研究者本人による短信をフィールドの現場から直接、可能な限りリアルタイムに、社会一般に発信する仕組みについて考察する。そして、主として人文・社会科学研究者のフィールドワークによって得られる情報の社会一般への速報的提供や、専門的な意義を超えて広く受け入れられ得る情報を公開することを実現する為の考え方・方法のひとつとして、「フィールドワークリアルタイム報告」の構築を行う。

ここで考えるフィールドワークリアルタイム報告とは、研究結果を完結的な論文等により報告する形式ではなく、フィールドに研究者が滞在する際に見聞きした事物に関する写真や感想といったものも含む、学術的な研究成果であることにこだわらない現在のフィールドの様子を生き生きと受け手に伝える形式を指す。

フィールドワーク中に報告を発信する研究者から見た取扱いの簡便性と新規に習熟しなければならない技術や知識の低減、報告される情報のリアルタイム性を重視した動作、およびシステム管理のやりやすさと継続性を、重要な構築の指針としている。

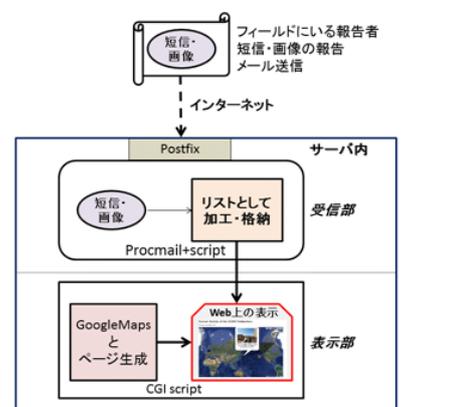
2. システムの構成

本研究で構築しているフィールドワークリアルタイム報告システムは、我々が作成した既存の「地域研究画像データベース」の基幹部分をベースとしている[1]。また、サーバ上でのシステムの構成としては、報告を受信する受信部と、蓄積データから公開の為のページを作成する表示部に、大きく分けて考えることができる。

前章で触れた様に、閲覧者への情報提供の方針と報告を公開する側で使用できる機能を限定することで、システムとして簡便性と速報性を重視している。その為、メールシステムを用いたの情報やコマンドの送信、Google Mapsを用いた蓄積情報へのポイントのとりまとめと表示を採用した。また情報の公開目的等について、速報とひとつの研究機関程度の規模での運用に限定した想定とすることで、過去の蓄積データへのアクセス性や、ソーシャルな水準での大量のデータの取り扱いの為の仕組み等を簡略化し、全体の見通しの良さを確保した。

調整中の部分も含む、システム全体の概要を、図1に示す。

図1：システム構成



受信部では、報告の入口として Postfix 等のメールサービスを立ち上げておく。所定の形式で送られたメール本文及び添付ファイルのデータが、Procmail等を介してフィルタスクリプトに渡され、最終的に情報の蓄積と表示部による Web 上への掲載が自動的に行われる。

報告者から見たシステムのインタフェースは、報告の内容に関する情報と操作命令についての、メール送信のみとなる。メールという通信手段がおそらく現時点で最も普及し、普遍的に共有される手続きであると考えられるので、本システムに参加するにあたっての新しい知識の習得や技術的習熟を極力低減する為これを採用した。

送信内容は、メール本文による報告の基本情報、メール本文による報告表示に関する制御の命令、添付ファイルによる画像データの3つのパートに分類できる。

メール本文による情報では、報告者名・報告地点の座標・地名等7項目を送信する。これらは、TAB区切り形式のテキストデータとして蓄積される。メール本文による報告表示に関する制御の命令では、報告の掲載期間の指定などができる。操作の簡便性の為に命令の指定は必須ではなく、報告情報のみの送信も可能である。報告削除等特殊な状況で必要となる命令については、構築の最終段階で実装してゆく予定でいる。添付ファイルによる画像データでは、主として報告写真の送信を想定している。この際、写真のGeotagによる座標の指定がなされていた場合は、優先順位をつけて参照する仕様としている。

システムの表示部では、TAB区切り形式テキストの情報と画像データとから、ウェブページとマップ上での情報へのポインタを動的に生成・表示をする。図2に、マップ上に表示されたポインタから、個別報告を開いた状態の例を示す。

図2：報告の表示例



報告者毎に区別されたアイコンがマップ上にポインタとして表示され、そこから報告本体に到達できる。マップへの表示はデフォルト設定では期限が設けられ、それは同時にシステム全体の簡便性に資する工夫ともなっている。

本システムの構成については、例えば[2]においても論じられている。

3.構築・運用に関する考察

本システムの構築にあたって注意を払ったのは、ここまでの議論の通り報告者が人文・社会科学研究者であるという想定と、システムの長期的な管理という視点である。

構築者の主観として簡便と考えられるシステムを作成した場合でも、異なる経験を下地とした視点では簡便ではなかったり、利用者が求めるものとは異なる方向での簡便性であったりすることは、一般に散見される。

本研究は、情報学的新規性を多少犠牲にしても既知の仕組みであるメールシステムをインタフェースに採用することで、人文・社会科学研究者が情報環境を利用する際、現実に慣れ親しんでいる環境との整合性を最優先した点に特色がある。

システムの長期的な維持と有効活用の継続は、特にシステム管理を行う人材に限られる様な研究機関等では、深く考察されるべき課題である。システム構築時には技術的に高度で多大な効果の見込めるものであったとしても、構築者の手を離れた後のシステム管理では、管理資料の散逸や後継の管理者による理解不足等が徐々に蓄積され、運用自体に支障をきたす場合が、残念ながら少なくないと経験的に言うことができる。

本システムでは、そういった負の変化をなるべく起こさない様な工夫としての、標準的既知システムの採用を意識している。

この様な課題への取り組みも重視し、今後考察を継続してゆきたい。

謝辞

本研究は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センタープロジェクト及びJSPS 科研費 23500307により実施されている。

参考文献

- [1] 梅川通久, 荒木茂: 「地域研究画像データベース」を利用したフィールド写真の収集と公開, アジア・アフリカ地域研究, Vol. 8(1), pp. 52-74, 2008
- [2] IPSJ Symposium Series, Vol. 2012, No. 7, pp. 247-252, 2012